

月開黃花、此亦大於諸瓜、結實大者徑尺餘、長一二尺、嫩時綠色有毛、老則蒼色著粉、霜後尤白、其皮厚硬、其肉肥碧、其瓢白虛如絮、其核亦白、在碧白瓢中而成列、其肉可爲蔬食、近代霜後采之、煮熟而殮、然不爲上饌、民間野人之所用、或有冬種者、至明年而肥大也、世俗所謂治久疝未詳之、

〔和漢三才圖會^百〕^藥冬瓜 白瓜 水芝 地芝 和名加毛字利、或用字音呼、^{○中}

按冬瓜處處皆有、攝州西成郡多出之、藏蓄之以無痕者置棚上及煤行處、至翌夏亦不敗、如有痕者不經旬而腐、

〔重修本草綱目啓蒙^{二十}〕^藥冬瓜 かもくり トウガン 防州 トンガ 伊州^{○中略}

外皮ニ白毛アリ、故ニカモウリト云、カモハ氈ノコトナリト、大和本草ニ云リ、京師ノ産ハ皆形圓ニシテ西瓜ノ如シ、他州ノ者ハ多クハ形長シ、伊州ニハ長サ三尺餘ナルアリ、方言江戸トウガント云、^{○中略}凡ソ冬瓜ハ遅ク熟シテ霜ヲ經ル者ヲ良トス、故ニ冬瓜ト名ク、然ルニ今ハ早ク種、早ク採ルヲ尙ブ、故ニ六七月ニ多ク出ス、名實ニカナハズ、

増、附方ニ、楊氏家藏方ヲ引テ、十種ノ水氣ヲ治スルニ、大冬瓜一枚蓋ヲ切テサナゴヲ去リ、蓋ヲ合シ、ソノ合シタル所ヲ封ジク、リテ、日ニ乾シ、糯糠ニ大羅ノ内ニテ煨シ、火盡テ後取出シ、焙乾シテ末トシ、梧子ノ大サニ丸シ、每服七十九、冬瓜子ノ煎汁ニテ日ニ三服ス、此方神効アリ、京師ノ一醫秘方トシテ、專ラ水病ヲ治ス、余^{○小野}嘗テ水腫荏苒トシテ愈ヘズ、已ニ喘滿氣急スル者ニ、冬瓜一味ヲ黑燒ニシテ服セシム、數十日ヲ經テ全癒ヲ得タリ、

〔長崎聞見錄〕唐冬瓜

唐種の冬瓜は、唐人館内杯に、唐人自ら作りて食料とするなり、此を見るに到つて長大也、小口切にして、差わたし壹尺四五寸ばかり、其長三尺四寸計、日本にて作る冬瓜には、緑色の上白粉あり、彼地の冬瓜は白粉なき也、